

保育における観察研究の諸問題 (一)

保育における観察研究は、子どもや保育のなまの姿をとり上げて問題にすることができるといふ利点をもつが、それに伴う困難も多くある。

第一に、信頼できる現場にゆきあたることである。はじめから冷たい批判の眼をもって見るような関係である場合は、観察研究を深めることはできないであろう。もちろん、完全な現場はないし、どこでも長くふれているうちに、疑問の点や問題が見えてくるのが当然である。しかし、その現場の保育担当者が、その場面を責任をもって動かすのを、安心して見守ることができないと、観察研究にはいつてゆくことがむずかしい。同じこ

とが保育者から観察者にむけてもあてはまる。観察者が保育者から信頼されない場合には、研究をすすめてゆくことがむずかしいであろう。これも最初からできているものではなくて、多かれ少なかれ、相互に不安やとまどいがある、しだいに信頼しあえるようにつくりあげてゆくものであると思う。

第二に、このような保育者と観察者の関係が保証されていて、なお、観察者が子どもや保育者に影響を与えることを避けることができないことである。観察者がいない状態の保育を観察することは不可能なことである。観察者の影響をできるだけ少なくするようにつとめた場合でも（樹木によりそい、背だけ



を低くするなど)、子どもや保育者は観察者を全く無視できるとはいえないであろう。やはり、観察者が存在するという条件のもとで観察することになる。

まして、観察者が多人数になるときは、観察者の影響は大きくなり、ある人数以上になると、観察と保育と両立しなくなるであろう。このことは学生の訓練のときにいつも問題になることである。

第三に、保育者として子どもと共に動きながら子どもを観察するときには、第三者としての観察では得られないものがわかるということである。これは当然のことである。保育者として長時間子どもにふれ、子どもを育てるときには、自分の全身の感覚をもって子どもにふれている。それに対して観察者は、視覚と聴覚に主として頼って観察している。視覚と聴覚でとらえるものは、子どもが外に表現したところのことである。だから、観察のしかたによっては、外側からだけしかとらえないことになる。保育者の場合には、子どもと共に動くから、共通の体験ができ、そこでは子どもの内面に即して理解される。

第四に、観察の視点をどこにおくかということである。外側に表現されて、観察者の視覚と聴覚によってとらえられる資料に主として着眼する、客観的な観察の場合もある。これも用い

方によっては、価値がある。

子どもの内面に即して、子どもの感じ方や考え方を理解するには、保育者として共に動くことができるが大へんよい。

観察者の立場に立って、子どもの内面に即して観察することもある程度可能である。それは、視覚と聴覚だけで観察するのではなく、その場面で感じることでできるものをたいせつにすることに可能になる。それには、観察者が逃げ腰にならないで、そこにとどまる心のかまえ、先入観を排してその場面に集中するかまえなど、前提条件があり、(それは要するに、自然でありのままの態度ということであるが)それには訓練を要するものである。

第五に、観察したことを記録にする仕方が問題になる。時には長い客観的な資料そのものが価値をもつ場合もある。いずれにせよ、その記録が、記録者にとり意味をもつことがたいせつである。その点で、記録をあとになって見直して、自分にとっての意味を明らかにすること、またその訓練をすることが重要である。

最初に述べたように、観察研究は、多くの困難な課題を負っている。どれをとっても、解決されていない課題である。しかし、生き生きとした子どもの生活や、保育をそのままにとらえ

て、研究をすすめてゆくには、観察法を用いてもっと研究がすすめられねばならないであろう。

解決されない不十分なままに、私どもがすすめている観察研究の過程で、そこに生ずる困難な問題を紹介することにする。

(津守 真)

観察記録を続いで

守 永 英 子

三歳から入園した幼児十五名、四歳から入園した幼児二十名、合計三十五名の五歳児のクラス。

四月の末から、児童学科の先生や大学院生十数名の観察が始まりました。決まったテーマで観察するというわけではなく、各自がそれぞれ自由に観察記録をとり、隔週に研究会をもち、三人のレポーターの報告を中心に話し合いをするというようなもの였습니다。

一学期も過ぎ、観察記録もかなりの量になりました。隔週の研究会には、なかなか参加できませんでしたが、観察記録は大分読ませていただきました。各自が自由に観点を決めてとった

記録ですから、内容も「目につく一人の子どもを追ったもの」「グループの動きの変化、発展を追ったもの」「描画・ままごと・砂場あそび・かたづけなどの活動にしばって観察したもの」「危機的な場面(けんかがおこりそうな)の観察」「観察者を観察したもの」「単に外から見える行動の記録でなく、一つの見方にもとづいて観察されたもの」など、いろいろです。三十五名の幼児が、保育室、遊戯室、園庭を使って自由に遊びまわらる中で、十数名の観察者がとる記録ですから、保育者が参加している場面もあり、保育者の注意の中にははいつているが参加はしていないという場面もあり、また、ほとんど保育者の目にふれていない場面もあります。そして、保育者としては、それぞれの意味で、興味もあり、疑問もあり、何やらいたくもありません。これらの観察記録は、あくまでも、観察者が自分たちの研究のために行なったものですが、これらの記録を読んで、保育者の立場としてどう思うか、何か書くようにとの編集部からのお話なので、考えてみることにしました。

観察者と保育者

いいかえれば、見る側と見られる側といえるでしょうか。見る側は、ひたすら「見ることに集中して行動するのですが、